不眠症に対する睡眠薬の治療経過と労働機能障害との関係

OCCUPATIONAL HEALTH PRACTICE AND MANAGEMENT

➤目的

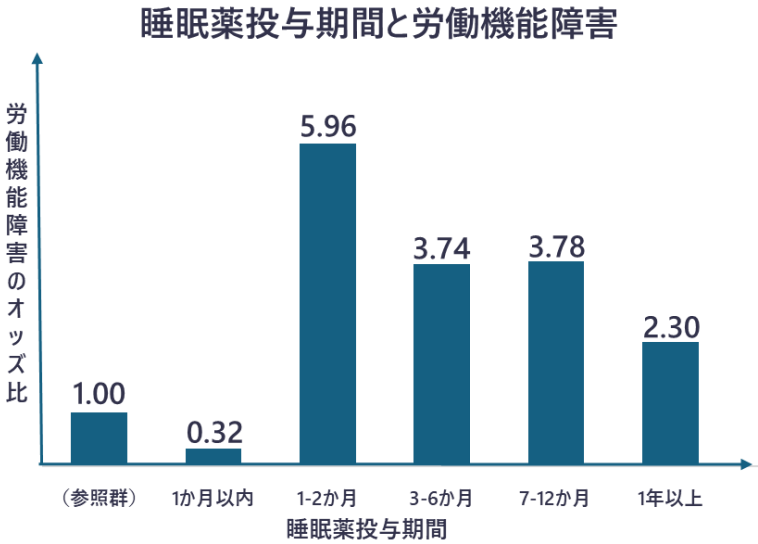
睡眠薬による治療は不眠症の改善が期待されるが、同時に効果の持ち越しによる日中の眠気や機能障害を引き起こす可能性がある。
不眠症に対する睡眠薬治療の経過が労働機能に与える影響を明らかにする。

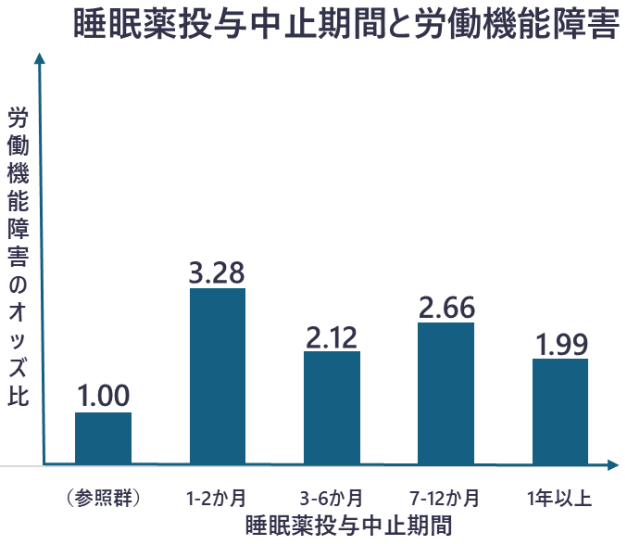
➤方法

日本企業の労働者36,375名を対象とした。アンケート調査データから労働機能障害を測定する指標（Wfun）の結果を抽出した。アンケート回答日から遡って16か月間の不眠症の病名及び睡眠薬の投与を健康保険組合の保有するレセプトデータから抽出し、アンケート調査と突合して分析した。不眠症の病名登録がない労働者を参照群とし、不眠症の病名登録があり、睡眠薬の定期的な処方が行われている、または行われていたが観察期間中に中止した群を治療群または治療中止群として、治療期間または治療中止期間ごとに中等度以上の労働機能障害を有するオッズ比をロジスティック回帰分析によって算出した。

➤結果

治療群、治療中止群ともに、参照群と比較して有意に労働機能障害のオッズ比が高かった。治療期間、治療中止期間が長くなるにつれ、オッズ比の増加は漸減傾向を認めた。
治療群のうちアンケート回答月に初回の処方がされた超急性期群のみ、有意差はないものの参照群と比較して労働機能障害のオッズ比が低かった。





睡眠薬による治療を必要とする労働者は、労働機能障害を呈している。投与開始、投与中止してから早期の時期はリスクが高いが、その後はリスクは漸減する。
不眠に対する睡眠薬治療では治療の効果と副作用のバランスを定期的に評価し、漫然と長期処方することは避けるべきである。

Makoto Okawara ,Tomohisa Nagata,Masako Nagata,Makoto Otani,Koji Mori,Yoshihisa Fujino. Association between the course of hypnotics treatment for insomnia and work functioning impairment in Japanese workers. PLOS One 15(12): e0243635. 2020. doi:10.1371/journal.pone.0243635

本研究はコラボヘルス研究会において実施しました。コラボヘルス研究会の詳細は、 https://www.collabo-health.jp/